

第3章 ホイアンの歴史的環境

第1節 前ホイアン時代

ホイアン市街地の概要をみたところで、ホイアンをめぐる歴史を整理しよう。西暦紀元前数百年頃から15世紀頃の中部ベトナム地域に、オーストロネシア系住民が残したサーフィン（Sa Huynh）文化とチャンパ（Champa、林邑、環王、占城）文化を「前ホイアン時代」（仮称）とよび、それ以降、ベトナム人（狭義のベトナム人）の支配下に入った時代を「ホイアン時代」（仮称）として記述する。なお、この章は、『ホイアンの町並みと建築』（昭和女子大学国際文化研究所紀要Vol.3）のなかの第2章に加除筆をしたものである。

1 サーフィン文化

ホイアンという地名が生まれたのは、16世紀末と考えられている。しかし、ホイアン周辺の歴史は古く、紀元前にさかのぼる。この「前ホイアン時代」にはふたつの大きな文化があった。サーフィン文化とチャンパ文化である。

サーフィン文化は、北部ベトナムのドンソン文化と同時代で、西暦紀元前数百年から紀元後2世紀の間に中部ベトナムで栄えていた、稲作をともなう初期金属器文化である。サーフィン文化の最初の遺跡は、フランスの考古学者たちがクァンガイ（Quang Ngai）省サーフィン町の砂丘上で発見し、1937年にマドレーヌ・コラニーによって正式にひとつの文化として認定された。この文化の特徴は甕棺墓で、その副葬品として鉄器や瑠璃製装飾品、ガラス小玉、有角玦状耳飾り、双獣頭形耳飾りなどがともなう。また中国の貨幣をともなうこともある。土器は供献土器を特徴とし、文様に線文や貝殻文がみられる。とくに、有角玦状耳飾りや双獣頭形耳飾りは、フィリピン西海岸、タイ中部、マレー半島北部などでも出土しており、紀元前後頃に、すでに東南アジア海域で活発な交流がおこなわれていたことを証明している。

サーフィン文化の遺跡がホイアン市内だけでも50ヵ所以上発見され、主に旧トゥボン川沿いの砂丘上に立地している。遺跡の大半は紀元前後頃のサーフィン文化後期に属し、前期・中期の遺跡がないのがこの地域の特徴である。近年、ハノイ国家大学・ダナン省博物館とホイアン市遺跡保存管理センターが合同でハウサー（Hau Xa）遺跡などを発掘調査し、豊富な副葬品をもつ甕棺墓を多数検出している（写真図版3）。このサーフィン文化がその後のチャンパ文化に継続するのか、現在のベトナム考古学界の大きな関心事である。後期の遺跡が集中するこのホイアン地域は、この問題を解明するための絶好なフィールドであり、遺跡保存管理センターの考古学研究者たちが熱心に研究をつづけている。

2 チャンパ文化

サーフィン文化につづいて、2世紀から15世紀まで中部ベトナム一帯はチャンパ王国によって支配されていた。チャンパ王国はオーストロネシア系のチャム族を中心とした国である。チャンパ文化の遺跡は中部から南部にかけて分布するヒンドゥー教の神殿群を特徴とし、その分布の中心のひとつはトゥボン川流域であった。トゥボン川の流域には、政治的な都であるチャキウ（Tra Kieu、Simhapura）が営まれ、上流には宗教的センターであるミソン（My Son、4～13世紀）が築かれていた（写真）。そして現在のホイアンあたり

には経済の中心となる都市があったと考えられる。ただし中国の文献では林邑浦と記されたこの都市が具体的にどこにあったのかはまだ明らかにされていない。この地域は、チャンパ碑文ではアマラーヴァティーとよばれていた地域である。

林邑浦を舞台にすでにチャム人たちは外国と活発な交易をおこない、沈香など南海の物産を輸出していたと考えられる。9世紀中頃、アラブ商人が書いた『シナ・インド物語』に「スンドル・フーラート」の名でホイアン沖のクーラオチャム（チャム島）のことが「海のただ中にある島で、…真水がある」と記されている。この時代には、すでにアラブ商人たちがホイアン地域に出現していたのである。

14世紀以降、チャンパ王国は南下してきたベト人（狭義のベトナム人）たちの前に国運が傾いていく。いくつかの戦いの後、黎朝がチャンパの最後の首都であったヴィジャヤ（現ビンディン付近）を占領したのは1471年であった。ホイアン一帯がベト人の支配下にはいったのはもっと早い時期であるが、交易地としてホイアンの発展はつづいていた。ホイアンの誕生はチャンパの港を継承しつつ、この地にベト人が入った15世紀から、直接の準備が始まったものと考えられている。

ホイアン周辺のチャンパの遺跡や遺物には、トゥボン川の河口にあるチャンパ祠堂跡やタインチェムなどにある神像（象など）がある。また、クーラオチャム（チャム島）では9世紀前後のイスラム青釉陶片や中国越州窯系青磁片などが出土し、トゥボン川流域には中国北宋代の青磁片や白磁片が分布している。東西交易の重要な地であったことが、出土遺物から判別される。

（菊池誠一）



ミソン遺跡（写真：菊池誠一）

第2節 ホイアン時代

16～17世紀は、ヨーロッパ商人が東南アジアの各地に進出し、活発な東西交易をおこなっていた時代である。同時に、日本人や中国人も東南アジアの物産である生糸、砂糖、香料などを求めて、進出してきた時代である。そして、各地に日本町ができていった。この時代、ホイアンは南シナ海と東シナ海を結ぶ接点として注目を浴び、実質的な中部の支配者である阮氏（広南阮氏）の政策のもと国際貿易都市として誕生し、発展したのである。

しかし、このホイアンは19世紀になると、土砂の堆積によって港湾の機能に陰りが生じてしまった。そして1884年にベトナムがフランスの保護国となった時点で、ダナンが商業センターとして優位にたち、ホイアンの商業活動は衰退してしまった。

16世紀から20世紀までのホイアン時代を6期に小区分し、各期を簡単に概観し、またホイアンに関するおもな出来事を年代順に並べてみよう。

1 16世紀後半：阮氏の南遷とホイアンの誕生

ホイアンが誕生したのは16世紀後半であろうと考えられている。当時のベトナムは黎朝の時代であったが、1527年に武将莫登庸（マック・ダン・ズン）が帝位を篡奪したため、以後275年にわたるベトナムの分裂時代がはじまった。

莫氏政権の支配地域はほとんどトンキン地方（紅河デルタ）に限られ、その南のタインホア地域には黎朝の旧臣たちによって反莫勢力が形成された。1532年に阮淦（グエン・キム）が黎朝の後裔を奉じてタインホアで挙兵し、莫氏との間で戦闘が開始された。阮淦の亡き後、鄭検（チン・キエム）が反莫勢力の実権を握ったが、阮淦遺族に圧迫を加えたため、阮淦の次子阮潢（グエン・ホアン）は難を避けるため、1558年に同族や同郷の有志多数を引き連れて順化（フエ地方）の鎮守となった。いわゆる“南遷”である。阮潢は当初、愛子（アイトゥ、クアンチ省）に拠点を設け、その後、茶鉢などに移り、着々と中部の支配権を確立していった。阮潢は1570年以降、広南地方の鎮守も兼任するようになり、事実上“順・広”の主となった。そして阮潢は外国貿易に積極的に乗りだすことにより、国際貿易都市ホイアンが誕生するのである。

ところで、鄭氏を中心とした反莫勢力は1592年に莫氏の本拠ハノイを攻め落とし、黎朝の復興に成功した。莫氏の残党は1677年まで中国との国境地域、カオバンに本拠をおき蠢動をつづけたが、大きな勢力とはならなかった。そして、黎朝の復興に大きな力のあった鄭氏は1599年に黎帝より王爵をうけ、実質的な鄭氏政権の樹立をはかった。ここに、皇帝の名目的支配の下で実質的な権力を掌握した主（チュア）とよばれる武将政権が誕生し、17～18世紀のベトナム史は、北部の鄭氏と中部の阮氏が対立抗争するなかで展開していく。当時の外国人は鄭氏をトンキン（東京）、阮氏をコーチシナ（交趾支那）または広南国とよんで区別していた。

・1553年に書かれた『烏州近録』（楊文安著）に、ホアイフォーとカムフォー（錦舗）という社名（村名）

がでてくる。カムフォーの地名は今もあり、現ホイアン市を構成する3つの町（フォー）のひとつである。ホアイフォーはヨーロッパ人によって訛ってフェイフォ（Faifo）と記録されたという。

- ・1558年、阮潢（グエン・ホアン）が一族や同郷有志多数を率いて順化（トゥアンホア、フエ地方）の鎮守となる。これは鄭氏からの圧迫を避けるためであった。
- ・1570年、阮潢は広南（クアンナム）の鎮守も兼任。
- ・1577年、中国商人が順化から広南に向かったおり、途中で日本船に拿捕され、乗組員が薩摩に拉致される事件が発生。日本船の中部ベトナム渡航の最初の記録と思われる。
- ・1585年、白浜顕貴という日本人の船、5隻がクアビェット（越海口）にあらわれ掠奪をおこなったため、阮氏の水軍が攻撃するという事件が発生。また、1601年に阮潢から徳川家康に送られた書簡に、この事件のことが記されている。
- ・1592年、豊臣秀吉が海外渡航船に朱印状を発給したとされ、その渡航先に広南や交趾の名があげられている。
- ・1596年、ガリナードがカンボジア遠征の帰途、ツーラン（現ダナン）に寄港した際、日本船を目撃し、両国船員の間で紛争が生じた。
- ・1598年、長崎から日本船が交趾に渡航した。

2 17世紀：日本町の成立、鎖国後は中国人中心の町へ

阮潢は在職56年間に、順・広地域を強固な支配下におきつつも、北部の鄭氏政権に対しては、表面的には恭順の意を示していた。しかし、阮潢没後、阮氏は北部からの離脱をはかり、1627年に両氏の戦争がはじまった。この戦争は1672年まで断続的に起こり、ドンホイ（現在のクアンビン省）付近のニャットレ（日麗）川を中心として激戦が展開された。阮氏は1630年にこの地域に強固な土塁を築き、また火器の優勢やポルトガル人の支援をうけて戦いを有利にすすめ、1631年と1643年に大勝した。しかし、以後は一進一退をつづけ、1673年以後はジャイン川（澧江）を境に両者が対峙するようになり、約百年の休戦に入った。

北部鄭氏と戦う一方、阮氏は中部から南方開拓のため、つぎつぎとチャンパ領土を奪っていった。1611年にフーイェンを1653年にカインホアを奪い、鄭軍の捕虜などを使い、開拓をすすめた。

ところで、阮氏は、内政面では支配下の海港であるホイアンに外人居住区をつくり、治外法権を許すなど、外国人の通商活動に保護をあえた。そして、日本町が誕生するのであった。記録によると1617年頃には、ホイアンの日本町は成立していたようである。

日本人はおもに朱印船によって東南アジアの各地に渡っていった。朱印船は、徳川幕府による朱印船制度の確立する1604年から鎖国政策が実行された1635年までの約30年間に、少なくとも356隻を数えている。朱印船の渡航先は阮氏支配下の広南がもっとも多かった。主な輸出品は銅、銅銭、鉄、所帯道具などであり、輸入品は生糸、砂糖、香木、鮫皮、蘇木などであった。

ホイアンにあった日本町は、『茶屋新六交趾国貿易渡海図』（図4）に二階建て、あるいは三階建ての木造建物が、道の両側に三丁ほどつづいていると記されている。この日本町には代々監理者がおかれ、

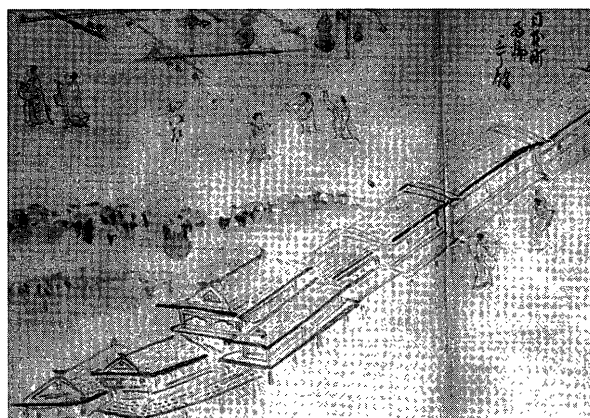


図4 茶屋新六交趾国貿易渡海図（中京テレビ提供）

角屋七郎兵衛などが務めていた。しかし、徳川幕府による鎖国政策のため、海外渡航が禁止されるようになるとホイアンの日本町は衰退していったと考えられる。しかし、在住日本人のなかには東南アジアの各地に商船を派遣したり、中国商人を介して交易をつづけていく者もいた。また、鎖国後、日本市場に残ったオランダと中国が日本から銅や銅銭、肥前磁器（伊万里焼）などをベトナムに運んだ。

・1601年、徳川幕府の外交文書集である「外藩通書」に収録された「安南国」からの書簡のうち最初の書簡がこの年にだされている。これは、阮潢から徳川家康に送られた書簡である。なお、同書には1694年までの計61通が集録されている。

・同年、家康は上記の阮潢からの書簡に対する返書をだす。そのなかで、商船に朱印状をもたせる旨、述べた。1635年の鎖国令まで、徳川幕府は356通の朱印状を発給したが、うち37艘はトンキン（東京、鄭氏治下）に、71艘が広南（ホイアン）に向かった。

・1607年、オランダ東インド会社のコルネリス・マテリーフ・デ・ヨングがチャンパに到着。そのおり、日本船3艘を目撃。

・1608年、有馬晴信の朱印船、チャンパに向かう。

・1617年、三浦案針（ウィリアム・アダムス）が平戸からホイアンに向かい、ホイアンで日本人居留地を目撃。

・同年、タイから占城（チャンパ）に派遣されたイギリス船の水夫が全員日本人という。

・1618～22年、イタリア人イエズス会士クリストフォロ・ボルリ（Christoforo Borri）はダナンにきて、ダンジョン（阮氏治下中部ベトナム）にとどまった。1631年、ヨーロッパ人宣教師がベトナムについて書いた初めての本である『コーチシナ王国におけるイエズス会士の新たな伝道団に関する記述』をローマで出版した。そのなかに日本町についての次の記述がある：「ここでグエン氏の領主は日本人と中国人にその僑民の人口に応じて家屋を建てる特権を与えた。そして大市を組織するのに都合がいいように都市を建てさせた。この都市はフェフォと呼ばれる。都市はかなり大きく、ふたつの町を区別できる。日本町と中国町である。彼らは各々別々に生活し、別個の統治官を置き、各国の風俗と法に従って生活した」。

・1624～26年、宣教師アレクサンドロ・ド・ロード、ホイアンに滞在。彼の書物『行程と宣教』の中にホイアンから日本への輸出品のことが記されている：「砂糖もたくさんあり、…。彼らは日本に輸出している」。

・1629年、日本人墓碑（日本・孝文賢具足君墓）。この墓は畑のなかにあったが、石碑はホイアン市の資料館に保管されている。なお、年代は1689年の可能性もある。

・1630年の『天南四至路図』に「大占海門」「会安舗」「会安潭」「会安橋」の地名がみえる。「会安橋」は屋根つきの橋の絵がついている（図5）。ベトナムの資料に「ホイアン」の地名がみえるのは17世紀以降である。

・1632年、オランダ船ワールモント号、広南沖で遭難。

・1633～36年、ホイアン日本町の頭領はドミンゴ。

・1633年、オランダ人の報告によれば、日本町が火災にあったという。

・同年、オランダ船ケンファー号、クイナム号、広南沖で遭難。

・1634年、7月に日本町に火災があり、オランダ商館等80戸を焼失し、火元の日本人が斬首されたという。

・同年、オランダ船フローテンブルクック号、広南沖で遭難。

・1636～40年、ホイアン日本町の頭領は平野屋六兵衛。

・1636年、オランダ東インド会社は、ホイアンにアブラハム・ダイケルを長とする居留地を設けた（1641年

まで)。

・1640～42年、ホイアン日本町の頭領は鹽村宇兵衛。

・1640年、五行山ホアギエム（華巖）洞（ノンヌオック寺）の『普陀山靈中仏碑』とよばれる石碑（図6）に、中国人に混じって多くの日本人の名前がみられる。これは、寄進者のリストで、たとえば「日本国茶屋竹嶋、川上加兵衛、朝見八助 銅570斤」などとなっている。「日本営七郎兵衛」は松本寺を建てた角屋七郎兵衛のことであろう。日本営（松本営というのもある）は会安社、錦舗社とともにならんでおり、当時日本人が住んでいた場所を指している。

・1641年、2隻のオランダ船が広南沖で遭難し、88名の漂流民が日本町の頭領鹽村宇兵衛に預けられ、日本町に滞在。

・1642～60年、ホイアン日本町の頭領は鹽村太兵衛。

・1645～53年、ミン・フォン（明香社＝中国人町、後に明郷社）が設立された（1654～61年の説もある）。明香は清朝に追われた明朝信奉者の中国人たちがベトナムに帰化して築いた共同体。1827年の明命帝の命令で、ほかの中国人共同体と併せて明郷社と改められた。

・1647年、谷弥次郎兵衛の墓（写真図版3）。

・同年、中国船で肥前磁器（伊万里焼）が東南アジアに運ばれる。肥前磁器の海外輸出の始まり。

・1650年、オランダ船、肥前磁器をトンキン（北部）の商館に運ぶ。

・1651年、12月にホイアンにきたウィルレム・フェルスターヘンが町の様子を記している：「最も主要な大通りは、川に沿って拡がっていて、大部分は石造りにして耐火家屋である。その中に60軒余の日本人の家があり…」。

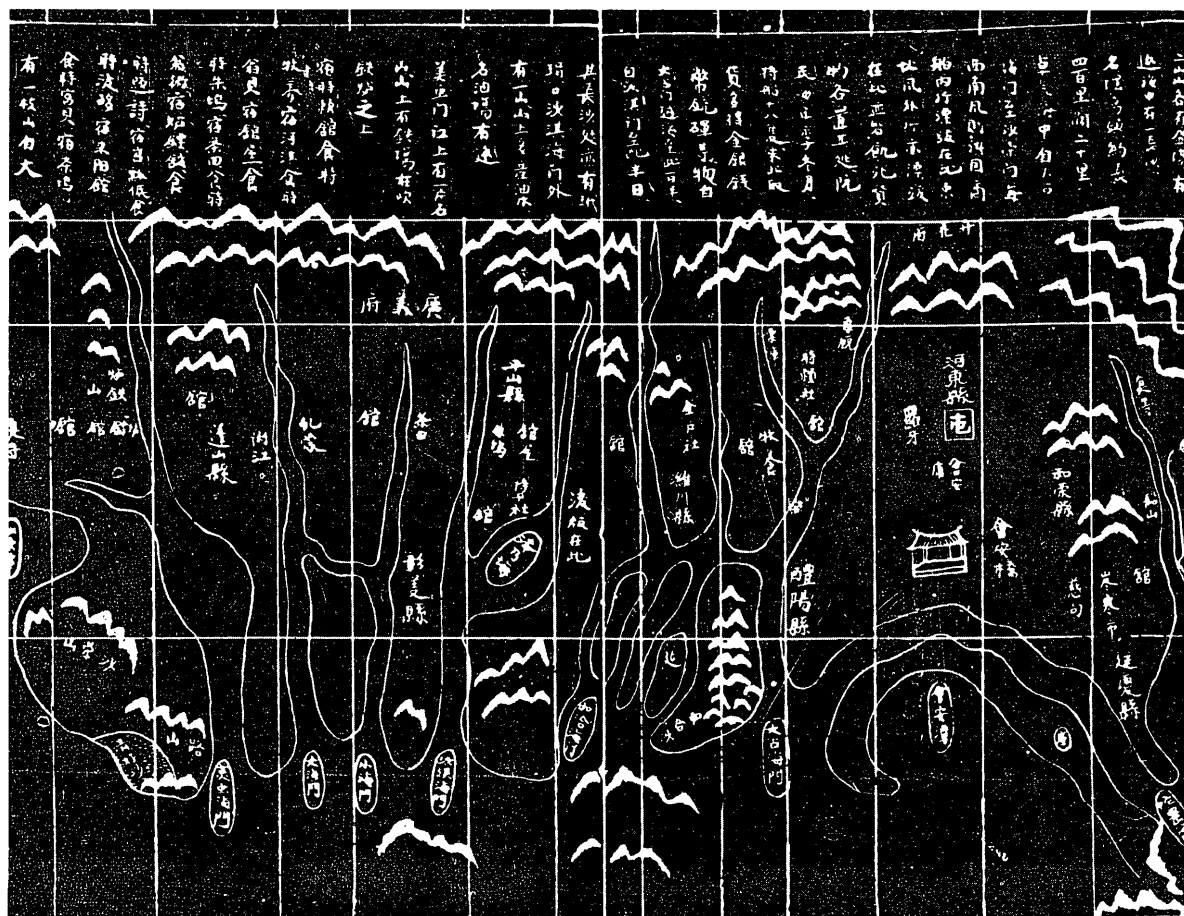


図5 天南四至路図（『洪徳版図』所収）

・同年、オランダ船、肥前磁器をトンキンの商館に運ぶ。

・1653年、関公廟板碑、王の栄誉が授けられたという公文。関公などの三大神をベトナムの祭壇に奉ることを許すベトナム宮廷の承認と、中国人の役割の追認について記されている。

・1658年、ホイアンで日本人の葬式があった：「チコ・ドノという人の身内に葬式があった。十字架をもって行列をした。それは日本人の名の下に行なわれた」。ホイアンの日本町にキリスト教徒がいたことを証明。

・1660～65年、ホイアン日本町の頭領は林喜右衛門。

・1665～72年、ホイアン日本町の頭領は角屋七郎兵衛。

・1670年、角屋七郎兵衛、松本寺建立。

・1673年、七郎兵衛晩年の手紙に寺の略図が描かれている。「松本寺は、河の北側に位置し、東が日本営、西が唐人町」。

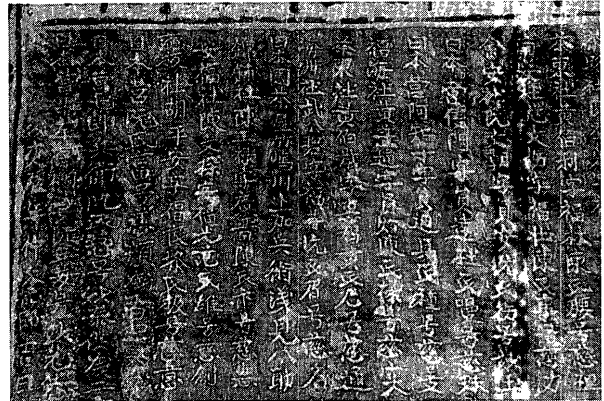


図6 普蛇山霊中仏碑（拓本）

3 17世紀後半～18世紀前半：華人街としての発展充実

17世紀後半から、東・東南アジア世界の交易に変化が生まれた。1670代の銅価の大幅下落により、オランダが東アジア・東南アジア市場の利益を失うことになった。ベトナムでは、重要な輸出品であった生糸がベンガル産の生糸の台頭のため、急速に輸出量を減らしていった。同時に、日本においても生糸生産が着実に増加し、そのため生糸輸入は1672年を最高に以後、縮小をしていく。このような情勢下、1699年にオランダ東インド会社は鄭氏治下の北部ベトナムから撤退し、そのため北部ベトナムは国際交易市场から脱落、農業国家へと回帰するようになった。

一方、阮氏政権は南部進出を強力にすすめた。1682年に清朝の支配を嫌う台湾鄭氏の一派を南部のミトやビエンホアの開拓にあたらせた。1697年にチャンパからファンラン・ファンリを奪い、そして1700年にサイゴンに嘉定府を築き、領土拡大をおこなった。阮氏は華僑勢力を利用しながらメコン・デルタを侵略し、またカンボジアの内乱にも乗じて、属国化をはかるようになった。このような阮氏の領土拡大は、その政治的・経済的地位を大きく向上させることになった。

17世紀中頃の明末清初の混乱、そして明の滅亡後、多くの中国人たちがおもに阮氏治下のベトナムに移住し、各地にかねらの共同体である明香社を築いた。ホイアンにおいても、日本人に変わって中国人が多数住むようになり、貿易の実権を握るようになった。いくつかの記録が当時の繁栄するホイアンの様子を描きだしている。

・1695年、イギリス東インド会社がトマス・パウイーヤ（Thomas Bowyear）を通商使節として派遣し、ホイアンでの居留地の設立について阮氏と交渉をした。交渉は失敗したが、次のような記録を残している：「このフェイフォの町は河に沿った1本の通りである。両側に家並みが連なり、およそ百軒ぐらゐの家屋がある。4、5軒の日本人家族を除いて中国人が住んでいる。日本人はかつてこの町の主要な住民で港の交通の主人であった」「商業は今や中国人の手に移った。以前に比べると量的に縮小し、盛んではなくなっているが、毎年少なくとも10～12艘の船が日本、広東、シャム、カンボジア、マニラ、そして最近ではパタヴィア

からやってくる」。

・同年、中国人僧釈大仙がフエから故郷広東へ帰るためホイアンにやってきた。そして次のような記録を残している。なお、彼は日本人のことについては言及していない：「岸から遠くを眺めると、マストが林立して矢を集めたようである。人に聞いてようやく食料船がホイアン港で風待ちをしているのだとわかった」「ホイアンは各国の商品が集まる大きな埠頭である。河に沿って街が真っ直ぐ3、4里続く。この街を大唐街という。道の両側に店舗が間隙なく並んでいる。住民はすべて福建人である。先朝（明朝）の服飾に従っている。商売は婦人が行なっている。ここに寓居している中国人は、交易のために必ず現地の女性を娶る」「街の端が日本橋であり、カムフォー（錦舗）である。対岸はチャニューで外国船の停泊地である。人口はちょう密であり、魚、海老、野菜、果実が朝から晩まで売り買いされている。薬が払底してトゥアンホア（順化）で購入できないときでも、ここでは買い求めることができる。おおよそホイアンは東南北の三方で海に接している。ただ西方のみは山地が連なる。そこを通る道はダイヴェットやトンキンに通じている。その故、西方数十里のところ鎮土衛門を設置している。その様子は王府のごときであり、近隣の警備防衛にあたっている」。

・1697年、キムソン寺、のち福建会館の中心になる。（チュン氏が建てたもので、当時は草ぶきであったという？）。

・1719年、阮福潤（グエン・フック・チュー）がホイアンに来訪し、日本橋を「来遠橋」と命名。「遠くからやってくる友人たちの橋」の意味である。なお、この橋について「日本商人の造る所なりと伝う」と記されている（図7）。

・1763年、日本橋再建、以前より美しく、大きくなる。梁に「癸未重興」の日付。

・1764年、アンチュール・ロゼ船長によるダナン港地図、パリのビブリオテーク・ナショナルに保存：「パ

リのビブリオテーク・ナショナルには「ホイアン港」という西洋人の描いた地図が所蔵されている。この絵は、クーラオチャム・クアダイ区域の形勢を非常に明確に記述している。沖からきた船が（おそらくベトナム政府への登録・検査の手続きをするために）クーラオチャムで停泊してから、クアダイに入ってフェイフォに至るという海路の行程を明らかに注記している。この地図からホイアンにとってのダイチェム口の役割が確認できる」。



図7 日本橋碑文

4 18世紀後半：西山（タイソン）党の乱とホイアン

ベトナム史上、18世紀は農民運動の時代といわれる。鄭氏、阮氏の両政権とも政治的・経済的に危機的様相があらわれはじめた。鄭氏政権下では、1730年以降反体制運動が勃発した。阮氏政権下では、1765年に阮福潤（グエン・フック・コアット）が亡くなると張福巒（チュオン・フック・ロアン）が幼主の阮福淳（グエン・フック・トアン）を擁

立し、摂政として専制政治をおこない、苛斂誅求のかぎりをつくした。そのため、1771年、クイニョン出身（ビンディン省）の阮文岳（グエン・ヴァン・ニャック）、文侶（ヴァン・ルー）、文恵（ヴァン・フエ）の三兄弟が反乱を起こし、またたくまに中部一帯に広がった。北部の鄭氏政権は、この機に乗じて阮氏打倒のため南下し、1775年に阮氏の居城富春（フースェン、現フエ）を奪い、西山党はサイゴンに逃げた阮一族を滅ぼし、西山朝（1777—1802）を開いた。また西山党は、北部に進軍し1786年に鄭氏を滅ぼし、黎朝の要請でハノイに侵入した中国軍をも敗走させた。ここに、南北の武人政権と350年にわたる黎朝に幕があり、1789年に阮文恵が帝位についた。

西山党の乱のとき、北部の鄭氏が1775年に広南營を奪い、ホイアン一帯は戦乱と化したようである。家屋破壊の様子がヨーロッパ人によって記録されている。

・1765年、常州（水戸）の姫宮丸、奥州住吉丸が遭難し、翌年に現在のダナン付近の海浜に漂着し、ホイアンに滞在する。

・1773年、中国人会館建設。

・1776年、黎貴淳（レ・クイ・ドン）の『撫辺雜録』に：「ミンフォン（明香）、ホイアン（会安）、ラオチャム（クーラオチャム）、カムフォー（錦舗）、ランカウ（廊鈎）などの村には、外国船の探索通報の官を置く。外国船舶がクアンナム地方に来て大占海口を通過してホイアンに赴くか、或いはダナン海門を通過してルウラム（流林）に赴くかして商売をする場合、地方の産物を納め、入港税（到税）と出港税（回税）を支払わなければならない」。

・1778年、イギリス人チャップマン（Chapman）がホイアンを訪れ、西山の乱で荒廃した町並みを目撃する：「会安に着いて、我われはその所に整然と区画の上に煉瓦で築いた建物で取りかこまれた道路は舗石を

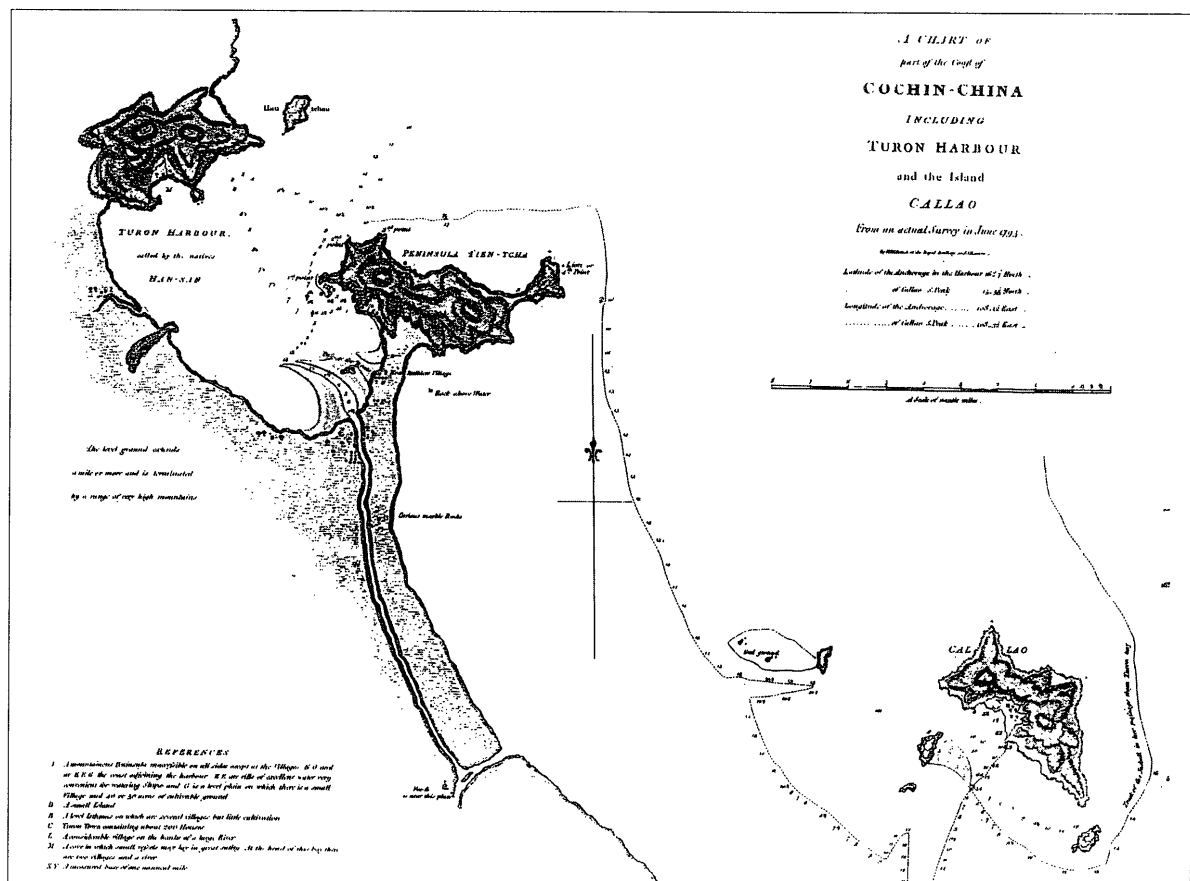


図8 1773年の航海図 ココ川がはっきりと描かれている

敷きつめて四通八達していた大きな都市の幾許も立たぬ廃墟しか見当ら無いのに驚かされた。嗚呼！これ等の建物はただ外牆を残すのみである」。

・1786年、阮映（グエン・アイン）の代理ピニョー・ド・ベヌとフランス王ルイ16世代理の外務大臣との間に条約が結ばれた。そのなかに「ホイナンという島」がたびたび登場するが、これはホイアンかダナンの諸説がある。しかし、このことはココ川の実証している。ル・フロック・デ・ラ・ガリエールの注記（1786年に描かれた地図の下に付されたもの）「ホイアン川には都の川（フォン川）と同様の不便さがある。川に沿って走る細長い隠れた砂州が川を浅くし、小さな舟しか通れなくしている。しかし、ダナン湾は最大級の船舶を受け入れることができ、非常に便利な海口である」。

・1792年、福建会館建設。

・1797年、西山朝ホイアンに船舶司を設立。船舶と商業を統括。華僑は、広東・福建・潮州・海南の4つの出身ごとに居住していた。港は依然チャニューに置かれていた。

5 19世紀：阮朝の成立、ホイアン市街地の拡張

西山党に倒された阮氏（広南）の唯一の生き残り阮福映（グエン・フック・アイン）は、タイに亡命した。そして、フランス人や華僑、タイの支援をうけてサイゴンに戻り、そこを拠点に西山朝に攻撃を繰り返し、1802年に国土統一を成し遂げた。そして即位して嘉隆（ザロン）帝を名のり、国号をベトナム（越南）とした。1945年までつづく、ベトナム最後の王朝である。

19世紀のホイアンは、ココ川もダイ川もしだいに浅くなり、大きな船舶が寄港できなくなっていた。しかし、商業センターとしてホイアンの発展はつづいており、川の南下にともなって新たにふたつの通りが建設され、市街地の拡張がはかられた。

・1806年、バロー（J.Barrow）『ダンジョンへの旅 1792—1793』をロンドンで出版。18世紀後半のホイアン川の絵「ホイアン河にて」を掲載（図9）。

・1818年、カムフォーのディン建設。

・1819年、アメリカ人ジョン・ホワイトがダナンを訪問：「小さな舟なら航行可能な小さな川の支流がダナン湾の東南から流れており、ホイアン市との交通を可能にしている」。これは、ココ川が埋まりかけていたことを示す記述である。

・1822年、明命（ミンマン）帝、ヴィンディエン江を掘削。ココ川に代えてクアハンに流れこむ川とクアダに流れこむ川を結びつけ、ダナンとホイアンを結びつける事業。カウゲーからカムサーまで850丈を掘る（1826年に深く広げられた）。

・1835年、明命帝、交易をダナンに限定：「ベトナムに来て商業活動を行なう西洋人の船はすべてダナンにしか停泊できない。中国商人は自らの交通運輸手段に乗っていく場合のみほかの海口で商業活動を行なうことができる」。

・1840年、グエンタイホック通り建設。

・同年、張氏、祖先礼拝の祖廟建設。

・1874年、日本橋修復。

・1875年、萃氏、祖先礼拝の祖廟建設。

・1878年、バクダン通り建設。

・1883年、カムフォー村が拡大し、コチャイがミンフォンに併合され、その名が消える。

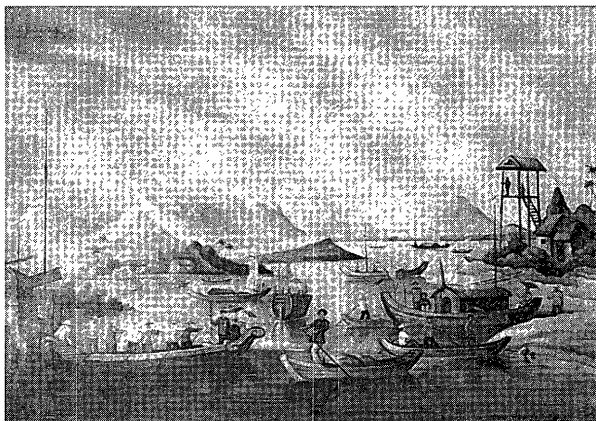


図9 18世紀末のホイアン川

6 19世紀末～20世紀初め：ベトナムの植民地化とホイアンの衰退、ダナンの成長

19世紀中頃から、ヨーロッパ勢力は東南アジアの植民地化をねらい、フランスは1858年、阮朝によるカトリック宣教師の弾圧を口実に、ダナン港を攻撃した。そして、1862年の第一次サイゴン条約、1874年の第二次サイゴン条約によってベトナム南部がフランスの領土となった。1884年のバートル条約によって、南部はフランスの直轄植民地、北部はフランスの保護領、中部はフエの阮朝が内政のみ行な

う保護国となった。こうした植民地化に対して、ベトナム人民による抗仏闘争がその後長くつづくことになった。

この時期、ホイアンはダナンを窓口とした中部最大の商業センターとしての地位を保っていたが、ダナンと結ぶ川が航行困難になったこと、またフランスの割譲地としてダナンが発展をはじめたことから、その商業活動を停滞させていった。とはいえ、今日みる美しい会館建築や町並みの多くの住宅は、この頃に現在の姿を整えたものである。

- ・1884年、広潮会館。
- ・1886年、出入港統計：ホイアンはダナンを出入口として生命力を保っていた。
- ・1887年、潮州会館。
- ・1888年、ダナン、フランスの割譲地に。
- ・1889年、卜婦人石碑（カムチャウ）。
- ・1891年、ココ川の航行を示す記録（この後、川が本格的に埋まりはじめ、経済活動はダナンへ）。
- ・1892年、海南会館。
- ・1900年、福建会館。

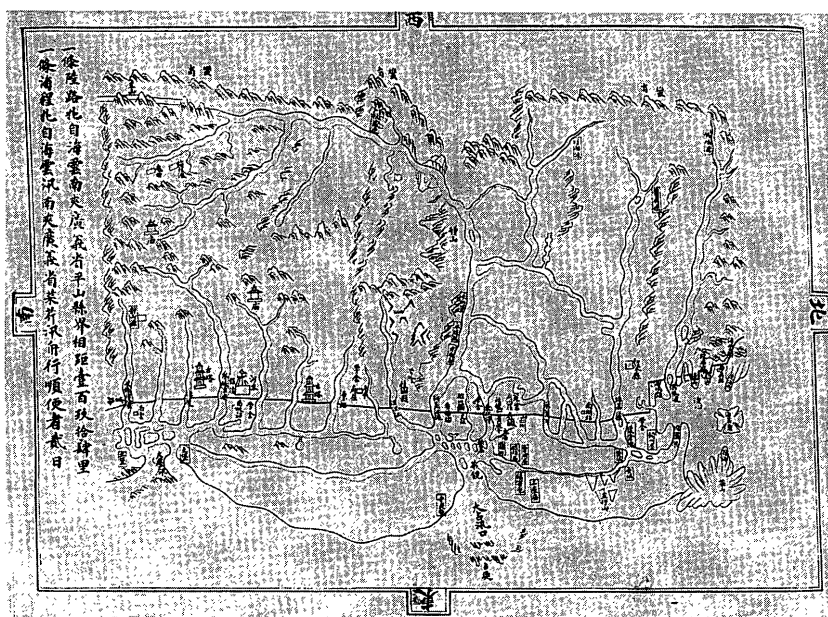


図10 同慶御覽地輿誌図（1885～88年）。ココ川が細く描かれている。（東洋文庫）

・1903年、カムフォーのディン再建、正面の祭壇と付属建築物を建設。

・1905年、ホイアンーダナンー海港を結ぶ鉄道（ドウコヴィーユ鉄道敷設、1916年の台風で活動を停止）。この鉄道敷設の時、日本人墓などが壊されたという。

・1911年、文聖廟修築。
・1917年、日本橋修復。
・1928年、洋商会館（中華会館）再建。

・同年、黑板勝美教授ら日本

人墓の修復を行なう。

(菊池誠一)

参考文献

岩生成一

1939「南洋に於ける日欧関係の推移」『東西交渉史論』上巻

1940『南洋日本町の研究』南亜細亜文化研究所刊

1956「占城国末期の国都と貿易港について」『東洋学報』第39巻第2号

金永鍵

1943『印度支那と日本との関係』富山房

桜井由躬雄編

1988『もっと知りたいベトナム』弘文堂

桜井由躬雄他

1993『東南アジア』朝日新聞社

藤原利一郎

1971「ヴェトナム諸王朝の変遷」『岩波講座 世界歴史12』

藤本勝次訳注

1976『シナ・インド物語』関西大学東西学術研究所

永積洋子

1992「17世紀中期の日本・トンキン貿易について」『城西大学大学院研究年報』第8号

日本ベトナム研究者会議編

1993『海のシルクロードとベトナム』穂高書店

吉沢南・片倉譲

1977「ベトナム概史」『ベトナム』水曜社

Vu Cong Quy

1991『Van Hoa Sa Huyen』（サーフィン文化）Nha Xuat Ban Van Hoa Dan Toc（民族出版社）